

マンハッタン・ダイナマイトにパンケーキ禁止?!

トーベ・ヤンソンの作品における伝統と正常性について*

ダン・ザハヴィ
石原悠子 訳

1. どのように哲学し始めるか

ウィリアム・レンコフスキはこれまで十分に評価されて来なかった一九七八年の論文で、現象学的な哲学的思索が待ち受ける古典的な方法的問題をとり上げている。我々が日々没頭していることや日常的な関心事、哲学以前の理論的な試み、また、個人間の違いや意見の相違などはすべて、疑う余地なく共有されたある特定の枠組みの中で成立している。すなわち、それらはすべて世界というものの存在を当然のものとして受け入れている。このような世界に対する信頼と先行的な理解は、それがあまりに基礎的で当たり前で自然であるがために、普段反省されることなく、また熟慮すべき前提であると認識されることもほとんどない。しかしながら、哲学が徹底的な問いの追求に従事する以上、この前提を吟味しないまま単純に放置しておくことはできない。実際フッサールやハイデガーなどの現象学者にとって哲学の主要な課題は、世界についての新しい経験的知識を獲得することではなく、むしろそのような経験的な考察が当たり前のこととして前提にしている事柄を考察し、また理解することにあった。ハイデガーがかつて述べたように、「哲学するということとはとりもなおさず、常識にとつては疑問の余地なく自明であるもののまっただけに謎めかしさによって根底から絶えず刺激を受けるというこ

と、その謎めかしさにじかに接してそれを敏感に感受しようということである」(Heidegger 1976, 18; 1989, 28)。だが果たしてそれはどのようなしうるだろうか。すなわち、我々はどのようにして日常的な実存を特徴づける素朴さから断絶しうるだろうか。あるいはもつと正確に言えば——哲学的態度とはフッサールの言葉を借りれば、思考の際立った反自然的方向を意味する以上 (Husserl 1901, 14)、すなわち、それが我々の普段の自然的態度の一部でもそれと連続するものでもない以上——、いったい何がそのような態度へと我々を動機づけるだろうか。レンコフスキは、すでにプラトンやアリストテレス (二九四二) が「哲学は驚きから始まる」と述べていたことを改めて確認するが (*Theaetetus* 155d, *Metaphysics* 982b12 参照)、いったい何が我々を日常生活で疑う余地もないまま受け入れているものに対して驚き始めるように動機づけるのだろうか (Lenkowski 1978, 303)。フッサールの典型的な回答はその説明に特に役立つものではない。というのも、フッサールはまるでフィヒテを思い出させるように、哲学的反省を我々の基本的な自由の行使として捉えている (Husserl 1913, 62-65)。そこでレンコフスキは古代ギリシアの思想家からヒントを得る。アリストテレスが『形而上学』(982b17-18) の中で指摘したように、驚きと困惑は相伴うものであるが、困惑とは自ら積極的に始動させるものではなく、むしろ「陥る」ものである (Lenkowski 1978, 314)。

そうであるならば、どのように始めるのかという問いは不適切な問いだったのではないか。我々の問うべき事柄は、我々が何をすべきかではなく、我々に何が起こるべきかということだったのではないか。断絶を始動する決断に先立つものは私の行いではなく、私に対して降りかかることなのではないか (Lenkowski 1978, 309)。自分の足場を失い、普段は居心地のいいものとして感じている世界が突如異様なものと化し、慣れ親しんだものが不思議で不可解なものへと化す (Lenkowski 1978, 309)。そのような状況が起こりうるのだとすれば、哲学的態度とは驚きの念を持ち続け、維持する試みであると言いうるだろう。ここでは世界の親しみが戻ることを拒絶することが問題となり、またそれは「世界が問題であることをやめることへの積極的な拒絶」を意味するだろう (Lenkowski 1978, 315)。

無分別な正常性 (normality) の領域を破る駆動力が我々の自由な決断ではなく、我々の身に起こり、我々を圧倒するものに由来するという考えは、ヤスパースやハイデガーの思想にも見受けられる。Philosophie II: *Existenzerhellung* (『哲学II—実存開明』) において、ヤスパースはある特定の限界状況、すなわち恐怖の感情や罪悪感、あるいは強い不安を伴うような状況に遭遇すると、それが我々を動揺させ、確立した慣習に従った生活を揺さぶり、混乱させることについて述べている。慣れ親しんだものの安心感を強制的に捨てさせることで、それらの状況は世界(そして我々)に対する新しい見方を可能にする (Jaspers 1956, 204)。また、ハイデガーは *Sein und Zeit* (『存在と時間』) において、我々の日常生活を慣習的な規範や基準に従ったものとして規定している。すべてが他者によってすでに理解ないし解釈され、支配的な判断や評価、また一般的な世界及び自己理解を無批判的に引き継ぐことで、すなわちこれらをすべてで疑う余地もないまま受け入れることで、我々は安心して落ち着くこと

ができています。しかしながら、不安が日常における慣れ親しみを崩壊させる。不安というものが単純にすべきことを普段通り継続すること、すなわち世界や自己自身の慣習的な解釈に頼り続けることを不可能にするのである (Heidegger 1927, 187)。不安によって圧倒されると、もつとも慣れ親しんだ場所さえ見慣れないものと化す。スーレン・オーアガーがハイデガーとレンコフスキを簡潔に比較した文脈で言うように、不安が持つ方法的機能は明らかである。我々哲学者は普段当たり前のように受け入れられていることを問わなければならない以上、我々にとって不安は天の賜物なのである。疑いの余地のないほど明白で慣れ親しんだものを問題にするという意味で、不安は通常の生活において我々を哲学へと駆り立てるような出来事として理解することができると Overgaard (2004, 29)。

2. 哲学とムーミン

さて、以上のことはムーミンといった何の関係があるのか。ムーミンの哲学的起源についてはよく知られている。トーベ・ヤンソンが後に述べているように、一九三〇年代前半のとある夏、彼女はイマヌエル・カントについての議論で弟のペル・ウーロフに打ち負かされる。悔しかったトーベ・ヤンソンはサマーハウスのトイレの壁紙にカントの風刺画として「想像しうる限りのもつとも醜い生き物」を描き、それがムーミントロール(の初期バージョン)だったのである (Jansson 2007a, 66)。だがムーミンと哲学との関わりはこれだけではない。ボエル・ウェステインはトーベ・ヤンソン公認の伝記で、一九四〇年代にヤンソンが哲学に没頭し、ニーチェやベルグソンらの思想に関心を寄せていたと語っている (Westin 2007, 185, 188)。さらにムーミンの古典的テキストにおいて、現象

学や実存主義の思想を強く思い起こさせるようなテーマを見つけることはそう難しいことではない。

例えば、ヤンソンは規則や慣習を抑圧的で息苦しいものとして描いている。ヘムル族はルールや秩序にうるさいことで悪名高く、植物や切手、蝶々などのコレクションの管理や整理に取り憑かれたように夢中であった。他にもフィリフオンカ族はやはり空虚な儀式や形式ばったしきたりの維持に専念し、楽しみのない生活を送っていた。フィリフオンカたちにとって義務や伝統が立派な人生を送る上で必須であったことは数多くの話で描かれている。例えば『ムーミン谷の仲間たち』(Tales from Moominvalley)の中では、祖母が昔住んでいたと誰かに聞いたというだけの理由で借りた家をひどく嫌がるというフィリフオンカが登場するが、その情報が間違っていたということを知った時には手遅れだった。すでに新しい家について親戚に手紙を出してしまった彼女は、今から計画を変更することは不適切だと感じるのであった(Jansson 1962, 40-41)。また『ムーミン谷の夏まつり』(Moominsummer Madness)の中では、毎年夏至祭前日に、一度も来た試しのないおじとその奥さんのために料理を作って虚しく待つフィリフオンカに、ムーミントロールとスノークのお嬢さんが会いに行くという話がある。彼女は、「祝日には自分の家族を食事に誘うことが義務だから」というだけの理由で、家族が嫌いにも関わらず毎年招待状を送っているのである(Jansson 1954, 86)。

ムーミンの家族でさえも時には似たように描写される。『ムーミン谷の冬』(Moominland Midwinter)の中では、彼らが伝統やしきたりを、その意味をもうや理解していないにもかからわず、ただ昔からずっとやってきたという理由だけで従っていることが描かれている。冬が来ると彼らはお腹を松の葉でいっぱいにし、シャンデリアに白の薄い織物を被せて眠る。そしてそれは「それが先祖代々受け継がれてきたしきたりで、

ムーミンは伝統に従うから」だと言われる(Jansson 1957, 12)。ただし『ムーミン谷の冬』では、もう一つ繰り返し登場するテーマを確認することができる。それは伝統を破り、しきたりを崩壊させることで、新しい世界を発見することができるというものである。例えばムーミントロールは冬の真っ最中に目覚めると、風変わりで愉快な生き物たちが住んでいる不思議で驚きに満ちた冬の世界を発見する。この他にも多くの事例があるが、しばしばその変化は我々の力を超越したような「自然の大きな力」によって引き起こされる(Jansson 1962, 58)。『ムーミン谷の彗星』(Comet in Moominland)では、天文学的な出来事があらゆるしきたりを破壊し、世界を転倒させてしまう。海は消え、すべてがまったく違った景色となる(Jansson 1946, 123)。また『ムーミン谷の夏まつり』の中では、ムーミン谷を襲った洪水が住人の生活する世界を変えてしまう。山稜は岩石の多い島となり、ムーミンの慣れ親しんだこじんまりとしたキッチンでさえも別物のようだった。それは天井の穴から覗くと、魔法のかかった薄緑色の水族館に見えるのであった(Jansson 1954, 88)。中でももっとも印象的なものはフィリフオンカにまつわる話である。『ムーミン谷の仲間たち』で、嫌いな家の中で楽しみのない生活を送っていたフィリフオンカが、竜巻の到来によって自己の実存を粉砕されてしまうというエピソードがある。天災が起きると、それがまさに無意味な日課の圧迫を粉砕することによって、かえって解放的な力として感じられるのである。受け皿用のクロスやティーポットカバー、小物などをすべて取り払い、すべてをひっくり返すことで、新しい始まりが可能になるのである。ヤンソンが言うように、「古いタイプのフィリフオンカは失われたが、彼女はそれが戻ってきて欲しいのかそれとも今のままがいいのかもはや分からなかった」のである(Jansson 1962, 56)。

『ムーミン谷の十一月』(Moominvalley in November)でも似たような話

がある。そこで登場するフィリフオンカは、外との交流を一切閉ざした家で大切な物に囲まれて安心しきったまま一人で引きこもっていた。蛹や身の毛のよだつようなゾツとする生物も含め、自然というものの脅威を感じていた彼女は、じゅうたんを掃除したり窓を綺麗にしたりして一日を忙しく過ごしていた。そしてスリッパのまま屋根の上にまで行ってしまった彼女は、雨で屋根が濡れていたため足を滑らせて屋根の上から落ちてしまいそうになる。自らの死に直面した彼女は、当初は頭がくらくらくして目眩や吐き気を催したが、次第に物の見方が変わっていく。ランプシェードが綺麗な赤い色であることや、天井のフックが変わった形であることに気がつくのであった。そしてそれまでは当然のこととして受け入れていた事柄、例えば重力といった自然本来の力や自分自身の認知能力について不思議に思い始める。フックにかかった物が他の方向ではなく下方向に下がるということがなんて不思議なんだろう。また私たちが物が見えるようにと目を持つていることがなんて不思議なこと、どうしてそんなことが可能なのだろうか。それまでは身の回りのものに守られていると感じていたフィリフオンカだが、ようやく自分があまりにも数多くのコーヒークップやお皿を所有していることに気がつく。そしてついに家を出て、思い切って世界へと飛び出して他の人に行き行くことを決意するのであった (Jansson 1970, 25)。

以上は、動揺をもたらす外部の出来事が、抑圧的な慣習、また空虚なしきたりや不可解な伝統といったものにはまりこんだ生活を崩壊し、解放しうることを記述した様々な事例である。我々を圧倒するような、制御不能で不安定な自然の力に直面すると、染み付いた習慣や常習的な自己満足は揺さぶられ、我々に新たに驚きの念を掻き立てる。限界状況の直面は一種のゲシュタルト変換を施し、世界に対してより豊かな見方を提供し、そして我々の生き方について再考させるのである。それまで我々

の生活を形作っていた慣習の無意味さに突如気がつくことは、我々をひどく不安にさせるかもしれないが、同時に解放的でもありうる。『ムーミン谷の夏まつり』の中の一話がこのテーマについて物語っている。ムーミントロールとスノークのお嬢さんによって助けられたフィリフオンカは、しきたりにこだわるのをやめることができて大きな安堵を覚える。夏の夜に飛び出したある日、フィリフオンカはたくさんの標識や警告の山を見つける。それらの標識はすべて何かしらのことを禁止したもので、ヘムレンが切り盛りする公園にもとあったものだった。ヘムレンは自然を栽培化すべく、すべての植物を整った幾何学的な形に切ったり綺麗に整えたりしていた。しかし自由を何よりも好み、禁止や制限、戒律などが大嫌いなスナフキンが公園を通った折にそれらのすべての警告や標識を取り外したのであった。だから山積みになっていたのである。フィリフオンカはその標識の山を見るなり、「どんなことも許される」ことに大喜びし、すべての標識で焚き火をして灰になるまでその周りを踊ろうと提案するのであった (Jansson 1954, 89)。

では、これらのことから我々はどうのような結論を導くべきだろうか。伝統や正常性は我々の考え方を制限する足かせであるとか、慣習の排除は最初こそ不安を駆り立てるが最終的には我々を陽気にさせ、また解放してくれるものであるとか、このように結論づけるべきなのだろうか。ムーミンの物語を実存主義的な観点から読み解くことはそれほど珍しいことではない。例えばユッカ・ラーヤリンネは *Muumit ja olemisen arvoitus* (『ムーミンと存在の謎』) の中で、キルケゴール、カミュ、ハイデガー、サルトルなどを引き合いに出しながらヤンソンの物語を解説しようとして試みている (Laajanne 2009)。またトゥーラ・カルヤライネンは近著の *Tove Jansson – Tee työtä ja rakasta* (『ムーミンの生みの親、トーベ・ヤンソン』) において、ヤンソンへのサルトルの影響について書いている。

カルヤライネンによれば、サルトルの自由概念がヤンソンにとってとりわけ重要な意味を持っていた (Karjalainen 2013, 112)。

3. コミック・ストリップ

ムーミンにまつわる小説や短編集は、一九四五年の『小さなトロールと大きな洪水』(The Moomins and The Great Flood) から最後の作品である一九七〇年の『ムーミン谷の十一月』に至るまでの数十年に渡って出版された。そしてこれまで当然ながらこれらの作品が主に注目されてきた。しかし、我々は大成功を収めたコミック・ストリップにおいてもムーミンの物語が展開されていたことを忘れてはならない。

初めてコミック・ストリップが出版されたのは一九四七年から一九四八年にかけて雑誌 *Ny Tid* においてだった。だがその数年後にヤンソンはプロジェクトを再開し、今度はイギリスの市場向けのシリーズを、ロンドンに拠点を置く新聞紙 *The Evening News* において一九五四年から一九七五年にかけて展開した。

以下では一九五六年に掲載された『預言者あらわる』(Moomin Begins a New Life) を少し詳しく見ていきたい。^② ヤンソンは小説や短編で展開したアイディアをただコミック・ストリップにそのまま転移させたのではなく、コミック・ストリップという媒体を新しいテーマを展開するために使った。コミック・ストリップでは物語の舞台や背景をラディカルに変える自由が与えられているため、小説のときとはまた異なるテーマについて探求することができた。以下で見るように、一九五六年のコミック・ストリップは九つのムーミン古典作品の実存主義的な解釈におけるものよりも、慣習、また正常性や伝統の役割について、よりニュアンスのある理解を提供してくれるのである。

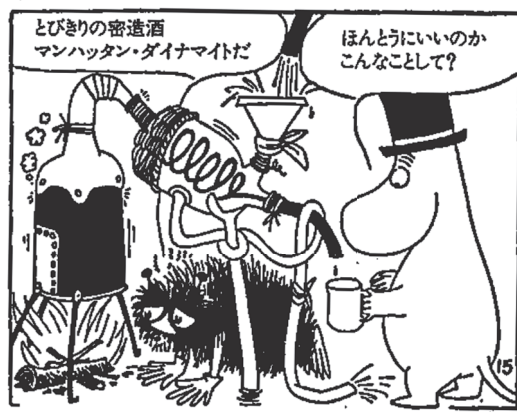


『預言者あらわる』(Jansson 2007b) では、ムーミン谷に自由を説く預言者が到来することでムーミン谷の生活が混乱する様子が描かれている。預言者の主要なメッセージは、自分の好きなことをして人生を楽しみ、幸せな生活を送るべきだというものだった。すでにそこそこ幸せな生活を送っているのではないかとムーミンママが丁寧に問うと、預言者は、みんな伝統や染み付いたしきたりによって制限され縛られているのだと反論するのであった。ムーミン一家はそれぞれ預言者のメッセージ



を真剣に受け止め、責任や約束、また他の様々な禁制からの脱却を図ろうとする。スノークのお嬢さんはムーミントロールのもとを離れ、ムーミンパパは木の上で「どうどうと恥しらずに」自分のために生きることを決意するのであった。

次第に預言者の影響がムーミン谷全体へと広がると、刑務所は廃止され、犯罪という概念さえなくなる。その結果ステインキーは自由の身となり、すぐにムーミンパパに長い間強いられてきた中流階級のあらゆるナンセンスから脱出する方法を教えようと励む。自由な恋愛と無制限の酒が大事だと言う。そして事実ステインキーが真っ先にムーミンパパに教えたのは、「マンハッタン・ダイナマイト」という密造酒の作り方であった。

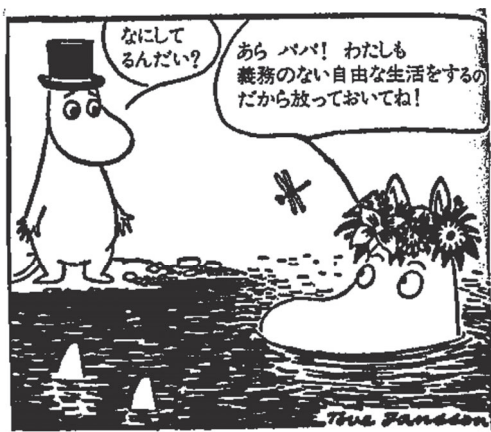


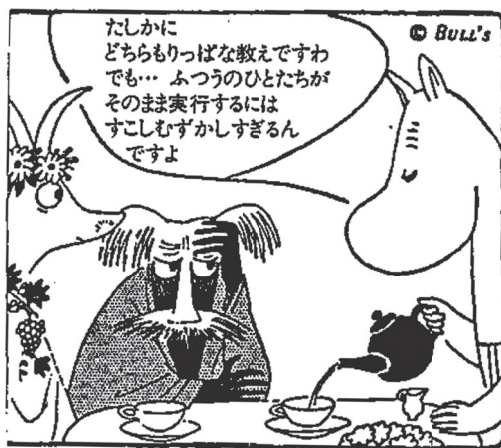
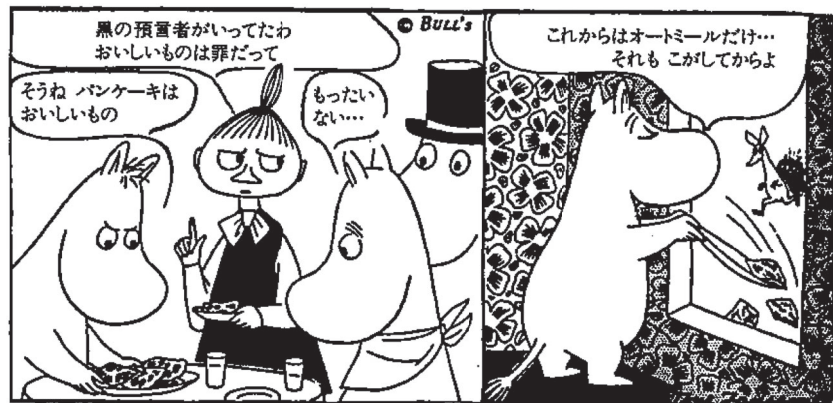
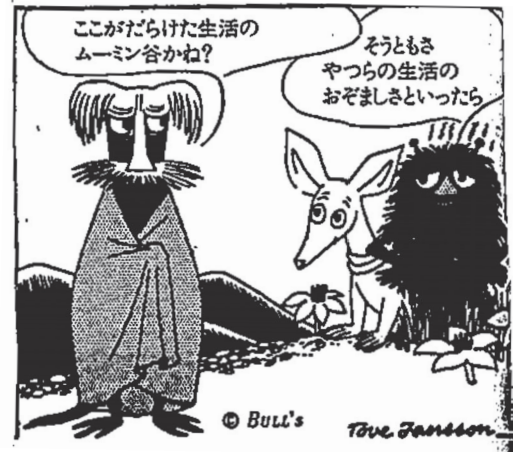
ちびのミイもまた予想通り楽しんでいった。スノークお嬢さんが新しい愛人とロマンチックな冒険に出ってしまったことに不満をこぼすムーミントロールに対して、ちびのミイは自分だって冒険心を持つべきだとただ励ますのであった。こうした助言を受け、ムーミントロールは「みんなの中でもっとも自由な」追い剥ぎになることを決意するのであった。

ムーミンママは依然として家のしきたりの大切さを守り、ムーミン

マンハッタン・ダイナマイトにバンケーキ禁止?!

ロールの誕生日パーティーまで準備していた。だが誰も来なかったことに失望し、さすがに嫌気が指したムーミンママは自分も自由を追い求めようと決意する。だが自由な生活に徐々に飽き飽きしていたムーミントロールと、そろそろ家に帰ろうかと考えていたムーミンパパをはこれに聞きつけて気がかりに思う。ムーミンパパはプライドが高すぎるあまり、木の上での生活が思っていたほど楽しくなかったと認めることができずにいたのであった。だがそんなムーミンパパをよそに、義務のない自由な生活を楽しんでいるのだから放っておいて、とムーミンママは言い放つのであった。





る。今となつてはそれらのことを懺悔し、義務の要求に従うほかない。そして犠牲と自制による新しい生活を送らなければならないと第二の預言者は言う。良しとされているものや楽しいものはすべて悪であるため放棄しなければならないと言われる。ムーミンパパは家を黒く塗り直し、パンケーキは禁じられ、焦げたオートミールが代わりに食べられるようになる。当然一人目の預言者はおとなしく引き下がるはずもなく、二人は取っ組み合いになるが、そこへムーミンママがあらわれ常識の回復を強く求めることでそれは中断される。どちらもいいことを説教してはいるが、普通の人たちにとって結局それらは実用的ではないんだとムーミンママは言う。ムーミントロールもまた最後の方のコマで「また昔のように〔普通に〕生きられる!うれしいな!」と言い放つ。以前の日常が戻り、正常性は回復されたのであった。

一度混乱したものを修復することはそう簡単なことではない。ステインキーはさらに不安定な状態を維持しようと力を尽くし、ムーミン谷にもう一人預言者——それも一人目とまったく違う内容を主張する預言者——を呼び、その結果状況はより一層悪化する。二人目の預言者はムーミン谷に到着するや否や、そこで目にした住人の罪深い生活に震え上がる。そしてその不道徳なやり方で良心、罪悪感、過失、罰などの考えを欠いた生活を送るに至らしめた偽の預言者に従った彼らをひどく非難す

4. 正常性の現象学

以上のことから、『預言者あらわる』は無制限の自由や、正常性の抑圧的な性格を強調するような単純な実存主義的（「サルトル的」）な解釈とはまた異なった理解を提供するものとして読むことができる。^③ 伝統や慣習、規範といったものは私たちの物の見方や判断力をただただ制限するようなものとして理解すべきではない。この物語の中で強調され、確認されていることは、どれ程我々の生活が正常性の様々なパターンによって組み立てられているかという点なのである。我々はしきたりや伝統が支配する世界に住み慣れているのであり、正常性は社会的に有意義な生活を送る上で妨害や障害なのではなく、むしろ必須なのである。このような伝統や正常性への着目は現象学よりも解釈学を連想するかもしれないが、それは現象学の伝統を継ぐ哲学者や精神科医、社会学者らによってすでに確認されていたということを以下で簡単に見て行く。

世の中でうまくやっていく上で、ゼロから常にスタートするということとはない。社会の中でうまく立ち回り、日常生活の様々な挑戦に対応しうるようになるために我々は多くのことを当たり前のことと見なす。我々が依拠するところの様々な前提、予想、規定の集積は、それまでの経験に由来するところもあれば、社会的に形成された部分もある。我々は記憶にある限り他者とともにある。一九二〇年代の草稿でフッサールが言うように、「私は後継者として私であり得ている。〔・・・〕あらゆる私のものは、一部は祖先から引き継がれてきた伝統、また一部は同時代の人たちの伝統に基づいている」（Husserl 1973a, 223）。正常性は社会という文脈においてのみ十分に意味を持ちうる。正常性は因習性（conventionality）でもある。個人を超えて「人はこのようにする」という意味合いを持っているのである（Husserl 1973b, 611）。

社会的現実というのは参加する主体同士の交流によって形成される。我々は生活を支配する様々な習慣や格言を、その過程をほぼ意識することなく、見えなくなるほどまで内面化する。だが社会的な激変や崩壊によって、我々が日常生活において前提にし、依拠している様々なものが自覚にもたらされることがある。

フッサールは一九三〇年代の諸論考において、異質な生活形式、すなわちフッサールが「異郷世界」と呼ぶもの、つまり規範や正常性の基準が自分たちとは異なる異質な生活形式との出会いが、時に自分たちの故郷世界の特殊性に気づききっかけになることについて述べている。他国や他文化の異質な視点に出会うことで、普段は当然のこととして受け入れ、疑問視することもない自分たちの慣習に対して、より批判的になったり、あるいはありがたみを感じるようになったりと、それまでとは違う視点で見られるようになる。また、多数の視点を包含し、統合するようにより包括的な理解を求めるように我々を促すこともあるかもしれない（Husserl 1973b, 214-218 参照）。

もう一つの例は、現象学的精神病理学の分野において見出される。しばしば言われてきたように、正常な生活の基礎的な特徴は、精神病による歪みの考察を通してはつきりと明るみに出ることができる。また病理の状態と対比することで、正常性とは本来与えられているものではなく達成されるものであるということが明らかになる。『自明性の喪失』（*Der Verlust der natürlichen Selbstverständlichkeit*）という古典的テキストにおいて、ヴォルフガング・ブランケンブルクは統合失調症を「コモン・センスに関わる病」であるとし、「自然な自明性の喪失」として規定した（Blankenburg 1971）。ここでコモン・センスとか自然な自明性と言われていることは、いわゆる「ゲームのルール」を暗黙に理解していること、あるいは何が適切、適当で、何が妥当でもっともらしいのかといったも

の感覚として理解することが出来る。それらの喪失によって、統合失調症を患った人は健常者にとっては当たり前のことにつまずき、困惑してしまう。ある若い女性患者は次のように話す。

私に欠けているのは何なんでしょう。ほんのちよつとしたこと、ほんとおかしなこと、大切なこと、それがなければ生きていけないようなこと……。〔……。〕私にはまだ支えが必要だと、つくづく思います。私にはごく簡単な日常のことからについてもまだ支えが必要なのです。〔……。〕私に欠けているのは、きつと自然な自明さということなのでしょう。〔……。〕だれもが道筋を、考え方を持っています。動作とか人間らしさとか対人関係とか、そこにはすべてルールがあつて、だれもがそれを守っているのです。〔……。〕わかるのかということ〔知識〕ではないんです、実際そうなんですから……。どんな子供でもわかることなんです。(Quoted in Blankenburg 1971, 42-43; 1978, 73-75)

現象学的社会学の伝統では、社会秩序を確立したり維持する活動を明確化する特殊な方法論がある。例えばハロルド・ガーフィンは、いわゆる「違背実験 (breaching experiments)」なるものを提唱した。これらの実験は、通常我々が前提にしているルールを壊すことで、かえって日常生活において暗黙裡に仮定している様々な社会的規範を浮き彫りにするというものであった。よく知られている事例としては、デパートで値切り交渉をしたり、レストランでメニューにないものをオーダーする、あるいは実家に帰った際に来客のように振る舞うなどがある。またガーフィンは、会話がスムーズに成り立つための規範が破られた時に人がどのように反応するかということについても分析している。

ある金曜日の夜、夫と二人でテレビを見ていた。夫が疲れていると言ったので、「どのようにに疲れているの？ 身体的に？ 精神的に？ それとも退屈なだけ？」と聞くと、

- (S) 分からないけど、身体的にかな、主に。
- (E) 筋肉痛とか骨に痛みがあるってこと？
- (S) まあ、そうかな。そんな専門的になるなよ。
- (テレビをさらに見た後に)
- (S) 昔の映画ってみんな同じような鉄のベッド台使っているな。
- (E) それはどういう意味？ 昔の映画すべてって意味？ それともいくつかの昔の映画ってこと？ あるいはあなたが見たことのある昔の映画ってこと？
- (S) どうしたっていうんだ？ 言っている意味なんて分かるだろう。
- (E) もっとはつきりと言って欲しいのよね。
- (S) 言いたいことくらい分かるだろうーうるさーよ！ (Garfinkel 1967, 43)

これらに似たような事態は、ヤンソンの作品のほか、ヤンソンがイラストを担当したルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』などの文学作品にも見受けられる。例えば、以下のアリスと三月兎と帽子屋との会話では、我々が普段人と会話する際に会話相手が同じルールに従うことを前提にし、またそうしない場合にいかに当惑させられるかということを示している。

大きなテーブルだというのに、三人は片隅にかたまっている。
「席はないぞー席はないぞー」近づいてくるアリスに気づくとそろって叫びだした。「たくさんあるじゃない」アリスは怒ってそう言う

と、テーブルのはしの大きな肘かけ椅子に腰をおろした。

「葡萄酒はいかが？」三月兎がもてなすようにすすめてきた。

アリスはテーブルを見渡してみたが、お茶以外のものは見あたらない。「葡萄酒なんてないじゃない」アリスは言った。

「そんなものはないよ」三月兎が言った。

「ずいぶん失礼ね、ないものをすすめるなんて」アリスは腹立たしげに言った。

「ずいぶん失礼だよ、招かれてもないのに席につくなんて」三月兎が言った。

「あなたたちのテーブルだなんて知らなかったのよ。三人分どころかずいぶんたくさんの席があるじゃない」

「髪を切ったほうがいいな」帽子屋はさつきから珍しそうにじろじろとアリスを見ていたが、開口一番こう言った。

「他人のことをとやかく言うべきじゃないわ」アリスはぴしゃりと言いかえした。「無作法ってもんよ」

これをきいた帽子屋は目をまるくして、ただひとつこう言った。

「鴉と物書き机、似ているのはなぜだ」(Carroll 1865, 44; 2011, 56)

ヤンソン自身の作品の中でも似たような事例がある。『ムーミン谷の仲間たち』の中の「ぞっとする話」(A Tale of Horror)で、ホームサの少年がちびのミイに出会う場面がある。ホームサは想像力旺盛で、あまりにも嘘をつくので父親によく叱られていた。だが彼以上に見事な嘘つきのちびのミイは彼の空想をさらに繰り広げ、ホームサはひどく怖い想いをする。ホームサは他人が本当のことを言うことに慣れていたため、ちびのミイとの出会いは彼を大いに動揺させ、そこで嘘の破壊力に気づかされるのであった。

マンハッタン・ダイナマイトにパンケーキ禁止?!

ホームサはひどく心をきずつけられて、もうすこしでなきだしそうになつていたので。「パパ……、あの子ったらね…… パパは信じないだろうけど、ぼくはもう千年たつたって、あんなところへいくもんか。」こういつてからホームサはあらあらしくつくくわえました。「あいつ、ぼくをペテンにかけたんだよ！まるっきりのうそをならべてさ！あんなうそをきかされると、むなくそがわるくなっちゃう。」

(Jansson 1962, 36-37; 1977, 56)

正常性は社会的現実を様々な仕方ですなご合わせ、まとめるものである。我々が吸う空気のように、普段気づかれることはないが、なくなったり損なわれたりしてはじめてその重要性に気づくのである。現象学的哲学では、日常生活における正常性の構成的意義に関する分析だけではなく、哲学的態度が普段は当たり前のこととして前提にされている正常性との持続的な断絶を伴うことについて論じている。^④

5. 結論

激変、離別、帰郷は、ヤンソンの著作の中で繰り返し登場するテーマである。これらの主題について深遠な示唆に富む九つのムーミン古典作品に注目する理由は当然なのかもしれない。しかし我々はコミック・ストリップを見過ぎるべきではない。それはヤンソンのイラストのクオリティーが高いからとか、グラフィック媒体の使い方が斬新で面白いからといった理由だけではなく、そこで展開される物語が素晴らしいから注目に値するのである。多くの物語が古典作品とはまた違った、自然や社会的な環境を舞台にしている。文脈や設定を自由に発展させたり変えたりすることで、ヤンソンはコミック・ストリップを通して多様で新しい

主題について探求することができた。とりわけ、コミック・ストリップはそれまでよりも共同生活の様々な特徴についてより詳しく分析し、批判的に論評している。本と一緒に読むことで、コミック・ストリップはヤンソンの描いた人間存在のさらなる特徴とニュアンスを浮き彫りにしてくれるのである。

注

* 本稿は二〇一八年に英語で出版された以下の論文の邦訳である。Zahavi, Dan. 2018. Manhattan Dynamite and no pancakes: Tradition and normality in the work of Tove Jansson. *SATS. Northern European Journal of Philosophy*. 19 (1). 5-19.

① 感情によって哲学的態度へといたる道については、Heinämaa (2002) 参照。

② 最終的に *The Evening News* に掲載されたコミック・ストリップは73話に及ぶ。最初の13話はトーベ・ヤンソン自身が書き、その後弟のラース・ヤンソンに手伝ってもらうようになり、第22話以降はラース・ヤンソンが一人で手掛けた。ここで扱うコミック・ストリップはトーベ・ヤンソン自身が手掛けたものである。

③ これがサルトル自身の考えであると言うつもりはない。サルトルの自由概念についての精緻な議論については Stewart (1998) 参照。

④ 我々が正常性や規範性に対して新たに獲得する哲学的な観点は、我々の生活に何か変化をもたらすのだろうか。すなわち、それは必然的に我々が従う規範の変容を意味するのだろうか。それとも規範そのものは変わらずに我々の規範に対する理解が変化するのだろうか。こうした問いは非常に重要な問いであり、よく知られている禅仏教における十牛図を思い起こせるが、本稿ではこれ以上述べることはできな

参考文献

Aristotle. 1941. *The Basic Works of Aristotle*. ed. by R. McKeon. New York: Random House.

Blankenburg, Wolfgang. 1971. *Der Verlust der natürlichen Selbstverständlichkeit. Ein Beitrag zur Psychopathologie symptomarmer Schizophrenien*. Stuttgart: Enke.

(訳書 一九七八『自明性の喪失：分裂病の現象学』木村敏・岡本進・島弘嗣共訳、みすず書房)

Carroll, Lewis. 1865. *Alice's Adventures in Wonderland*. New York: Dover Publications. 1993.

(訳書 二〇一七『不思議の国のアリス』久美里美訳、国書刊行会)

Garfinkel, Harold. 1967. *Studies in Ethnomethodology*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.

Heidegger, Martin. 1927. *Sein und Zeit*. Tübingen: Niemeyer. 1986.

Heidegger, Martin. 1976. *Logic: The Question of Truth*. T. Sheehan, tr. Bloomington: Indiana University Press. 2010. Originally published as

Logik: Die Frage nach der Wahrheit. Gesamtausgabe 21 (Frankfurt am Main, Vittorio Klosterman), 1976.

(訳書 一九八九『論理学—真性への問い—』佐々木亮・伊藤聡・セヴェリン＝ミユラー共訳、『ハイデッガー全集』第21巻、創文社)

Heinämaa, Sara. 2002. From Decisions to Passions: Merleau-Ponty's Interpretation of Husserl's Reduction. In T. Toadvine & L. Embree (eds.), *Merleau-Ponty's Reading of Husserl*, 127-146. Dordrecht: Kluwer.

Husserl, Edmund. 1901. *Logische Untersuchungen. Zweiter Band: Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis*. In Ursula Panzer (ed.), *Husserliana*, vol. 19, 1-2. The Hague: Martinus Nijhoff. 1984.

Husserl, Edmund. 1913. *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie. Erstes Buch: Allgemeine Einführung in die reine Phänomenologie*. In K. Schuhmann (ed.), *Husserliana*, vol. 3, 1-2. The Hague: Martinus Nijhoff. 1976.

Husserl, Edmund. 1973a. *Zur Phänomenologie der Intersubjektivität: Texte aus dem Nachlass*, vol. ii, 1921-1928. In I. Kern (ed),

- Husserliana*, vol. 14. The Hague: Martinus Nijhoff
- Husserl, Edmund. 1973b. *Zur Phänomenologie der Intersubjektivität: Texte aus dem Nachlass*, vol. iii, 1929–1935. In I. Kern (ed), *Husserliana*, vol. 15. The Hague: Martinus Nijhoff.
- Jansson, Tove. 1946. *Comet in Moominland*. E. Portch, tr. London: Puffin Books. 1967. Originally published as *Kometjakten* (Helsingfors, Schildts), 1946.
- Jansson, Tove. 1954. *Moominsummer Madness*. T. Warburton, tr. New York: Square Fish. 2010. Originally published as *Farlig midsommar* (Helsingfors, Schildts), 1954.
- Jansson, Tove. 1957. *Moominland Midwinter*. T. Warburton, tr. London: Sort of Books. 2017. Originally published as *Trollvinter* (Helsingfors, Schildts), 1957.
- Jansson, Tove. 1962. *Tales from Moominvalley*. T. Warburton, tr. London: Puffin Books. 1973. Originally published as *Det osynliga barnet och andra berättelser* (Helsingfors, Schildts), 1962.
- (訳書) 一九七三 『ムーミン谷の仲間たち』 山室謙弘訳 『ムーミン谷の仲間たち』 第九巻 講談社)
- Jansson, Tove. 1970. *Moominvalley in November*. K. Hart, tr. London: Puffin Books. 1974. Originally published as *Sent i november* (Helsingfors, Schildts), 1970.
- Jansson, Tove. 2007a. *Jorden går under! Tove Janssons första muminserie i Ny Tid 1947–48*. Helsingfors: Tiger Text.
- Jansson, Tove. 2007b. *The Complete Tove Jansson Moomin Comic Strips II*. Montréal: Drawn & Quarterly.
- (訳書) 二〇〇〇 『ムーミン谷のクリスマス』 富原真弓訳 『ムーミン谷のクリスマス』 第九巻 筑摩書房)
- Jaspers, Karl. 1956. *Philosophie II: Existenzerhellung*. Berlin-Heidelberg: Springer.
- Karjalainen, Tuula. 2013. *Tove Jansson: Work and Love*. D. McDuff, tr. London: Penguin. 2014. Originally published as *Tove Jansson – The*

- työ ja rakasta* (Helsinki, Tammi), 2013.
- (訳書) 二〇一四 『ムーミン谷の生みの親 ムーミン・ヤンソン』 ヤナギ貴子・五十嵐淳共訳 河出書房新社)
- Laajarine, Jukka. 2009. *Muumit ja olemisen arvoitus*. Jyväskylä: Atena.
- Lenkowski, William J. 1978. What Is Husserl's Epoche?: The Problem of Beginning of Philosophy in a Husserlian Context. *Man and World* 11. 299–323.
- Overgaard, Søren. 2004. *Husserl and Heidegger on Being in the World*. Dordrecht: Kluwer Academic.
- Plato. 1961. *The Collected Dialogues*. ed. by E. Hamilton and H. Cairns. Princeton: Princeton University Press.
- Stewart, Jon. 1998. Merleau-Ponty's criticism of Sartre's theory of freedom. In J. Stewart (ed.), *The Debate between Sartre and Merleau-Ponty*, 197–214. Evanston: Northwestern University Press.
- Westin, Boel. 2007. *Tove Jansson: Life, Art, Words*. S. Mazzarella, tr. Croydon: Sort of Books. 2014.
- Originally published as *Tove Jansson: Ord, bild, liv* (Stockholm, Albert Bonniers Förlag), 2007.

(タム・ザンヴァー ロビンハーゲン大学およびオックスフォード大学教授・主観性研究センター所長)
(ジョージ・ハムトン) 本学グローバル教養学部助教)